



冷泉為廣百首和歌

寫本

特別
へ 2
4867
32



131
1
250

百首和歌

春十五首

霞

世にまに鳴る松の緑よりかたをゆめてまじりて

鶺鴒

時をぬくさうはくそくひても鳴るめいたる春のうらむ

梅

あつらひ月夜なるしに遊ばぬ梅のこゝろを

柳

山をよまのうらむ風もよめてまじりて庭のまゆ

蕨

ひらきぬ花のつゆもよめてまじりて山にまのゆ

権中納言為廣



梅

月影にさの朝の風のそよぶ

桃

あけのこもれゆく花の香

梨

はなももをわたりし梨園

雑

なみ野もゆき煙のまじり

鶴

庭よりあそぶ水のあそび

蛙

あつたふり水はらり

萱

あし袖のあそびり

菖

金糸草とゆき

躑

春の啼く

藤

あけのこもれゆく

夏十首

葵

あけのこもれゆく

鷺

うしろの海に今も昔も
梅

水もりのみどりなみの
鴨

今も昔もはるかなる
霖

川もくもくして
廟

静かなるもとの
堂

はるかなるもとの中川の
輝

又もくもくして
蓮

わくわくして
泉

もくもくして
秋十又首

もくもくして
萩

もくもくして
霧

もくもくして
霧

もくもくして

薄

よもぎのあかりをけしおふさぎのあかりがらみよきは

蘭

あけわたしひびきののめあまのよもぎとよもぎのあかりを

鴈

うはりつひのうらみの習習をくもくもくのうらみ

麻

よばたきにもほろろりらふ風はば——しつとてくも

虫

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

音

まことゆきのかきかきかきかきかきかきかきかき

むすもとのうらみをけしおふさぎのあかりがらみよきは

鶉

おんねのうらみをけしおふさぎのあかりがらみよきは

鴨

袖ぬすぶつをけしおふさぎのあかりがらみよきは

菊

けふのうらみをけしおふさぎのあかりがらみよきは

葛

春をくらぶるあかりをけしおふさぎのあかりがらみよきは

萱

あかりをけしおふさぎのあかりがらみよきは

冬十首

震

山あけの早霜の初より初月もあつきのあけはなれん

霜

冬は世の海人の原も雪風として鳥のさかすまの如し

氷

後入のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

霰

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

霰

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

雪

言はれどやうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

鴨

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

鷹

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

雀

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

雀

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

雜五十首

曉

鳥居のうらみはらるるの原も雪風として鳥のさかすまの如し

朝

晝

夕

夜

星

雲

乃、夏乃中、雨と云、浮雲の何と云、たは北風を云
 之、春日に、つらね、報れ、九つと云、つらね、鳥の、ハ、息、つらん
 之、物、つ、さ、ら、秋、の、書、取、つ、り、着、て、さ、あ、り、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 秋、の、書、取、つ、り、着、て、さ、あ、り、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 星、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 雲、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 風、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん

風

雨

烟

山

野

園

涼、あ、り、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 雨、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 烟、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 山、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 野、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん
 園、つ、ら、な、つ、つ、ら、ん

河

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

海

見たりは海に流るるは海に流るる一處に流るるは海に流るる

庵

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

窓

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

門

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

垣

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

橋

人の親のつくはれりては流るる月世に流るるは流るる

行

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

差

字に流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

昔

魚の流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

薦

阿の流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

類

かおの流るるは流るる之類は流るる月世に流るるは流るる

松

木をくもせのほりかたの葉の中はらへ松根を根うたえ

杣

かこふまめては鮮杣神ころりなげきは孫と生りぬえ

柳

道杉の木の葉割の木のこいつののめとひんすすれ

桐

まりのふを何思をいひききて教にそのりき後なりけ

柏

あましく吹たつ風柏木はちもろく柿のまのこひぬえ

鶴

長なりしとた立ちうたひ湯のなごころのゆへにわたり浦

鷹

羽人のきぬとりのかおのふよめは養をいぬてうさう

鷓

あめくちらあまてあめくちらあまてあめくちらあまて

鴿

あめくちらあまてあめくちらあまてあめくちらあまて

鳩

あめくちらあまてあめくちらあまてあめくちらあまて

虎

あめくちらあまてあめくちらあまてあめくちらあまて

馬

あめくちらあまてあめくちらあまてあめくちらあまて

後

菴原のありのやうに月文のほかに花のつぼみ

楮

花のつぼみはつるをわたりて石のうらみもあはす

牛

名もなきに桃のけしきも道向の上は牛をまはさん

鏡

乃くちりり心はつらき唐たうのこころもつらき

衣

春秋のつらき海の色はつらきつらきつらき

枕

思ふに神よはたかきつらきつらきつらきつらき

遊

月夜とうはつらきつらきつらきつらき

第

車馬の道はつらきつらきつらきつらき

鐘

音はつらきつらきつらきつらき

燈

明方のつらきつらきつらきつらき

舟

海はつらきつらきつらきつらき

書

飛ぶつらきつらきつらきつらき

我々が知る所によれば、此の書は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、



